

# 浄土と地獄 立山曼荼羅の絵解きと見世物の口上

## 内藤正敏

特別研究員・東北芸術工科大学東北文化研究センター教授

### 立山曼荼羅

富山県にある立山は、大伴家持が『万葉集』で、「すめ神の領うぢほき坐います……」山と詠んだように神々が鎮まる霊山として、古くから崇拜されてきた。

また『大日本法華経験記』や『今昔物語集』などで、立山には日本中の悪人が墮ちる地獄があるとされ、恐れられてきた。この立山地獄は、室堂にある地獄谷で、いまも硫黄臭の強いガスを無気味な音をあげて吹きあげており、荒涼とした地獄のような風景が広がっている。

一方、室堂の周囲には、主峰の雄山から左へ大汝山、別山、劔岳、大日岳が広がり、右には浄土山、国見岳、天狗岳と、標高二五〇〇メートルから三〇〇〇メートル級の山々がそびえたち、胎蔵界曼荼羅の中心の八葉蓮弁の形で室堂をとりかこんでいる。まさに立山は浄土と地獄が共存する聖地である。立山の浄土と地獄を中心に、立山信仰の宗教思想を描いた「立山曼荼羅」と呼ぶ掛軸が伝えられており、かつて芦峯寺あしからじや岩峯寺いわくさしの立山衆徒によって絵解きがおこなわれていた。

立山曼荼羅は、立山開山縁起、立山禅定案内、立山浄土、立山地獄、布橋灌頂会の五つの要素から構成され

ている。ただし布橋灌頂会は、芦峯寺系の立山曼荼羅にだけあり、岩峯寺系のものにはない。

絵解きの実際のもようは、林雅彦氏が岩峯寺で発見された「立山手引草」という二冊の絵解き台本がその雰囲気をよく伝えている（林雅彦『増補 日本の絵解き』三弥井書房、一九八四年）。この「立山手引草」を参考にしながら、芦峯寺の立山曼荼羅（大仙坊A本）を眺めてみたい。

絵解きは、「奉皈命立山大権現慙愧懺悔 六根清浄一時禮拜供養恭敬 輪円開会一切衆生見聞隨喜 身心莊嚴除生死苦 發菩提心……」とおこそかに唱えてから始められた。そしてこの「四幅一面の大画」は、高祖先達が女人を救うために色心不二を開示して、我らの心の善悪をそのまま見る目に表わしたものであるから、疑うことをやめて敬礼供養をなすならば、この座がそのまま禅定ぞ……、と述べて本題に入る。

まず「抑立山ノ濫觴八人王四十二代ノ聖主文武天皇アル夜ノ御夢ニ紫雲アイクモ譚タマシシテ西方ヨリ来リテ……」と、文武天皇が阿弥陀如来の夢告で、佐伯有若を越中国司に任命する話から開山縁起が語られる。

その素筋は、佐伯有若の子・有頼が、父の鷹を放してしまい、その後を追って行く。鷹を見つけるが、突然、熊が出現

して、白鷹は驚いて再び逃げてしまう。怒った有頼が弓で熊を射ると矢は熊の胸にささる。さらに有頼が山中に追って分け入り、室堂の玉殿窟の中に入ると、阿弥陀如来と不動明王が出現した。その阿弥陀如来の胸には、有頼が熊に射た矢がささっていた。熊と鷹は、立山権現の本地である阿弥陀如来と不動明王が有頼を導くために現れた姿であった。有頼は慈朝上人の弟子となり、慈興と名のり立山を開いた……。

立山曼荼羅では、画面の左下に国守・佐伯有若の住む館があり、下部中央付近に逃げた鷹と有頼が熊を弓で射る場面が描かれ、右下に娑堂があり、材木坂を登って室堂へと曲りながら進む禅定道（登拝道）が描かれており、室堂の玉殿窟では、胸に矢がささった阿弥陀如来と不動明王の前で有頼が弓矢をすててひれ伏している場面となっている。この禅定道にそって、さまざまな伝説が語られる。

材木坂は若狭国の老尼が、美女と禿をつれ、女人禁制を破って登ったところ、途中に諸堂を建立するために置いてあった材木が石に化した。美女と禿は、その先で杉に化し、老尼はさらに登ったところで石になった……。立山曼荼羅では、女の首がついた杉が二本描かれており、これが美女杉と禿杉である。さらに上には老尼の首がついた姥石が描かれている。画面の中央付近に描かれる一ノ谷の獅子ヶ岩では、むかし北山石蔵という邪見の者がここで悪鬼となり人々を悩ませていたが、弘法大師が退治したという話が語られた。

また奥州板割坂の藤喜ノ丞という不信心な男が、ここで畜生道に堕ちて馬となり、頭は角が生えた。越中国の森尻権現の知明という悪僧が信者をつれて立山登拝をした時、ここで生きながら牛となり、額に角が生えてしまった……。立山曼



写真1 立山曼荼羅（大仙坊A本）

茶羅には、僧衣を着た牛や人面の牛馬が描かれている。興味深いことは、これを伝説にまつわる怪しげな角や牙などが、立山連峰の主峰、標高三〇一五メートルの雄山山頂の峰本社で拝観させていたらしいことである。『和漢三才図会』に、有頼所持ノ刀、有頼が熊を射た時の臺股鏃、行基菩薩奉

納の錫杖、若狭の老尼の額に生えた角二ツ、光蔵坊の天狗ノ爪、藤義丞が馬になつた時に生えた駒の角、鬼ノ牙一ツ……などが峰本社の「什物」として書かれている。

まるで見世物小屋のような雰囲気だが、立山登拝を先達する衆徒たちは、立山曼荼羅の絵解きをするように、立山の大自然のなかでもこんな話を語っていたのである。

## 浄土と地獄

立山曼荼羅をよく眺めると、樹木によつて宗教空間の意味づけがおこなわれていることに気づく。

左下の佐伯有若の館は俗界であり、城内には松があるが、里は落葉樹だけである。中央の芦峯寺と岩峯寺は、落葉樹に杉と松が混在しているが、ここは人間が住む俗界の聖地である。特に布橋の四隅を結界するように四本の杉が描かれており、杉が神聖視されていることを物語っている。

右下の脱衣婆の横に描かれた樹は楓が紅葉で、秋から冬へ季節の境界を示す樹として配されており、ここが山中他界への入口であることを表わしており、この先の勝妙川にかかる藤橋からは女人禁制となる。

山中の他界空間に入ると、杉と松になる。美女杉、禿杉と共に目をひくのが、画面中央の獅子ヶ鼻の上の扇子がいつぱいつるされた松である。これは「扇の松」といい、むかし弘法大師がここで護摩を焚こうとしたが、護摩木がなく、扇子の骨木で代用したといひ、この松に扇子をくりつける風習があった。実際に登ってみたが、扇の松は見当らず、この付近は標高が二〇〇メートル以上あるので松といつても五葉の松ではないかと思われる。

こうして立山曼荼羅では、杉や松によつて聖地性を表わしているが、聖地性といつても、美女杉や扇の松などがあるのは登拝道であり、まだ純粹な聖地ではない。人間界に連続する境界的な空間である。それがさらに登つた山々の浄土と地獄の他界空間になると、まったく樹が描かれていないのである。

「立山手引草」に、「室堂マデノ凡夫ニ乗ノ境界ヲ<sup>ラ</sup>転<sup>シテ</sup>從<sup>レ</sup>是菩薩ノ身<sup>ト</sup>成<sup>テ</sup>登<sup>ル</sup>故ニ此ノ六道ヲ<sup>ヲ</sup>オテ觀心切ニシテ六波羅密ヲ證シテ大慈大悲ノ心ヲ發<sup>テ</sup>登<sup>ル</sup>……」と述べており、室堂までが我々が生きている六道輪廻の世界で、ここから上の山々の浄土へ登り、菩薩の悟りの世界に入ると説いている。さらに室堂から雄山に登ると、頂上の峰本社には、阿弥陀如来(雄山)と不動明王(劔岳)が祀られており、この二仏は立山権現の本地である。雄山は阿弥陀如来の妙体そのものとされ、頂上で正念の称名を唱えるとき、「浄土山ニ紫ノ雲タナヒキ 天ヨリ曼珠の花雨<sup>フリンモ</sup>積リ 六種農動スレコハ云向<sup>イカン</sup>ト向ヲ見ルニ 忝<sup>カサシテ</sup>モ一光三尊ノ阿弥陀如来如<sup>レ</sup>是御来迎アラセ玉フ……」と述べている。

立山曼陀羅を見ると、雄山と浄土山の間には阿弥陀如来が二十五菩薩と共に来迎しており、天女も空に舞っている。また、左の方からも雄山に向つて弥陀三尊が来迎している。これは雄山そのものが阿弥陀如来の仏体であることを示しており、特に雄山から浄土山の方を見ると阿弥陀如来が「御来迎」すると述べているが、この御来迎はブロッケン現象のことである。

立山では、雄山山頂で朝日によつて起るブロッケン現象を「御来迎」とよんで特別に重視した。朝日が昇る時、東が晴れ



写真2 立山浄土 雄山(左)と浄土山(右)

では朝日でも夕陽でもよい。しかし立山では、御来迎は朝日で起るものに限られる。そのためプロッケン現象は雄山の西にある浄土山の方角に出現する。雄山は阿弥陀如来そのものとされており、雄山の阿弥陀如来が西方の浄土山の方角にプロッケン現象を起して来迎することになる。浄土山という地名も阿弥陀如来の極楽浄土からきているのである。

雄山で峰本社を拜した後、大汝山、富士ノ折立、真砂岳、別山へと、三〇〇メートルから二八〇メートルの立山連峰の雲上の尾根を縦走し、別山の頂上へ着くと、眼前に荒々しい岩肌の劔岳が見える。

これらの山々について、「立山手引草」では、大汝山は大己貴命で清浄光仏、富士の折立、真砂岳は豊斟浄尊トヨシツナで炎王光仏、

て西に霧がかかると、霧の水滴がブリズムの働きをして、霧の上に丸い虹の輪が浮かび、その中に自分の黒い影が映る。この神秘的な現象が西方極楽浄土から阿弥陀如来が来迎する姿とされたのである。立山以外の霊山でもプロッケン現象を御来迎とよぶが、他の霊山



写真3 立山地獄

シメント欲シテ 峰二八九品ノ浄土ヲウツシ谷二八一三三六六地獄ノ分野アリサマヲアラワシ……と、峰々の浄土の後に、こんどは立山地獄の恐ろしさを説く。

立山曼荼羅では、右に紅日、左に白月が描かれており、右は昼、光、左は夜、闇という対立性が設定されており、地獄は左側に描かれている。針ノ山の下には、焦熱地獄、大焦熱地獄、八寒地獄、衆合地獄、黒繩地獄、等活地獄、阿鼻地獄、叫喚地獄、血ノ池地獄、石女地獄で、死者たちが鬼に責められ、炎で焼かれたり、体に釘を打ちこまれたり、包丁で切り刻まれたり、鉄棒で串刺しにされたり、臼でつかれたり……と、さまざま苦しみを受けている。

これらの地獄の一つひとつを示しながら、「此ノヨフニ罪

別山は帝釈天で歡喜光仏の浄土としている。なお雄山は阿弥陀如来で伊邪那岐命、劔岳は不動明王で手力雄命である。まさに室堂から上にそびえる峰々は神仏の浄土なのである。

そして「衆生に善悪を智らせ速ニ解説ヲ得セ

人ノ一チ<sup>チ</sup>ノ身皮ヲハギテ鉄ノヤケタル柵ノ上ニ臥テ銅<sup>アガハネ</sup>ノ湯  
ヲツギカケ 又タ口ニ入ル五臟六腑ヤケトケ 五体内外ニ少  
モ安キ所口ナシ<sup>サケハント</sup>スルニ猛火口に入り舌に釘ヲ打……………」  
と、地獄の恐ろしさを強調している。

これらの地獄の部分をよくみると、食べようとすると食物  
が炎となり飢えに苦しみつづける「餓鬼道」や、牛の顔をし  
て衣を着た僧や目玉を鳥につつかれる人面牛などの「畜生  
道」、鎧を着けた武者たちが鬼の太鼓にあわせて刀で殺しあ  
いつづける「修羅道」が描かれている。また禅定道を登る「人  
間」と共に、空には「天女」が舞っている。峰々は仏の浄土  
であることを考えると、実は立山曼荼羅は「十界の図」なの  
である。

十界とは、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天の「六道」  
と、声聞、縁覚、菩薩、仏の「四聖」の悟りの世界をいう。

われわれの住む「六道」の世界は、迷いに満ちた輪廻転生  
の世界であり、いつ地獄や餓鬼道に墮ちるかわからない。た  
とえ天道に生まれても生老病死の苦から逃げることはできな  
い。

「立山手引草」でも、地獄道、餓鬼道、畜生道は三悪道であ  
り、修羅道は合戦終ることのない苦相で、人道は八苦三相あ  
り、不浄なる糞穢なる身をさまざまな織物でおおい隠してい  
る姿であると説いている。

そして天道についても、「死スル時ニノソソテ五衰ノ悲ミ  
有リ 五衰トハ 一ニハアタノ花カズラ<sup>タチマチニ</sup> 忍シボム 二ニハ  
キレイナ衣モチリニゲ枯クキクサル 三ニハ脇ノ下ヨリ汗出  
テ天人ノカラダクサクナル 四ニハ目クサル白クナル 五ニ  
八本ノ居所ノ願ハス時ニ天女眷属悉ク是レヲ見テ棄ル事クサ

ヤチリアグタノ如クニ思テ林ノ間ニ棄ル ステラレテ悲ミナ  
ゲケドモヨリツク天女ナケレハ今<sup>イマ</sup>は憑方ナシ……………」と、天人  
の哀れな末路を述べている。

こうした苦しみに満ちた「六道」の世界から逃げだすため  
に、立山衆徒たちは、立山浄土への登拝を勧めたのである。  
また女人禁制で立山に登れない女性には、「布橋灌頂会」とい  
う救済儀礼がおこなわれていた。

### 布橋灌頂会

布橋灌頂会は、明治の神仏分離まで、毎年、秋の彼岸に芦  
峯寺でおこなわれていた儀礼で、立山曼荼羅の右下に描かれ  
ており、浄土と地獄と共に大きなスペースをしめている。

その内容は、まず参加する女性たちが芦峯寺の阿闍梨たち



写真4 布橋灌頂会

に引率されて閻  
魔堂に入り、こ  
こで一人ひとり  
が今までの罪を  
懺悔して、閻魔  
大王の審判を受  
ける。ケガレを  
はらった女性た  
ちは白経帷子の  
死装束を着け、  
嬬堂川にかかる  
布橋を渡って嬬  
堂に入る。この  
時、閻魔堂から

布橋、嬬堂への道には白布が敷きつめられた。

嬬堂の中には、恐ろしい形相の三体の本尊と、日本六十六ヶ国を象徴する六十六体、合計六十九体の嬬尊が祀られていた。堂内に全員が入ると、すべての戸が閉められ、ローソクの光に無気味な嬬尊が並ぶ暗闇の中で法要がいとなまれた。夕方になって法要が終ると、前方の板戸が開けられ、眼前には夕陽に輝く立山連峰が現れるという趣向だった。それまで暗闇の中に閉じこめられていた女性たちは、美しい立山の雄姿に浄土を觀たのである。

この布橋灌頂会は、女人禁制で立山に登ることができない女性たちに、ここで擬死再生儀礼をおこなうことで、男たちが立山に登って立山禪定をはたすと同じ意味をもつ儀礼であった。

嬬堂に、祀られる嬬尊について、「立山手引革」で「三途川の嬬」で「三悪堂二趣ク者ノ皮ヲハギテヒラン樹に張ル」としているが、「立山曼荼羅」でも嬬堂の後で死者の衣をはいでいる。現存する嬬尊も三途川で死者の衣をはぐ脱衣婆と同じ恐ろしい姿をしている。しかし『立山略縁起』では、嬬尊は五穀と麻の種をもって天降った神で、「衆生生死之惣政所」とあり、まさに生と死を司どる嬬尊は、擬死再生儀礼の本尊にふさわしい神といつてよい。

布橋灌頂会に参加した女性には、「血脈」が授けられ、これを納棺すれば極楽往生できるとされた。

かつて立山衆徒たちは、冬の間各地の檀那場を歩き、立山曼荼羅を掛けて立山信仰について語り、男には立山浄土の登拝を勧め、女性には布橋灌頂のご利益を説いた。夏には立山登拝に集まる人々を自宅の宿坊で祈祷して宿泊させ、山に

登る先達をした。山里に住む立山衆徒たちにとつて、これらは生きるために最大の収入源であった。

立山曼荼羅の絵解きは二時間近くにもおよび、人々は立山衆徒が絵解きに訪れるのを楽しみにしていたという。彼らは言葉たくみな話術で地獄の恐ろしさを語り、立山登拝や布橋灌頂のありがたさを説き、聞く人たちのイメージをふくらませたのである。

### 見世物の「十界」

立山曼荼羅は「十界の図」として構成されており、その絵解きは日本の宗教史と芸能史の接点をみる思いがするが、見世物にも「十界」という出しものがある。

これは西村興行の親方で、名人見世物師だった西村岩吉さんに生前聞いた話だが、「十界」は、地獄めぐりをパノラマ風を作り、鬼が手をあげたり、子供が涙をふいたりするカラクリ仕掛けの人形を使ってみせたという。

これに「柳の小枝にうちかけて、来いよ来たれよ招くのは、これは三途ノ川のお婆さん……」といった口上をつける。愁嘆場の賣ノ河原では、哀れな感じの御詠歌調で、「一重積んでは母のため、二重積んでは父のため、三重四重と積む石は兄弟わが身の回向する。昼は河原で余念なく、幼心に遊べども、陽の入りあいのそのころに、地獄の鬼があらわれて、せつかく積んだ小石をば、金棒ぶって打ちくだき、またもや積みよつ積みよつとせめたてる。あまりの恐ろしさに、賣ノ河原をば、あちらこちらに逃げまどう……」といった口上をつけて案内したものである。

この「十界」は寺院でおこなう地獄絵の絵解きと変りなく、

口上も賽ノ河原和讃である。見世物の口上を聞いてみると、「東洋独特の仏言に因果応報ということわりあり……」とか、「因果はめぐる小車の……」「火の車つくる大工はなけれども、おのれが作り、おのれが乗りゆく……」といった仏教の影響を感じさせるものがみられる。

見世物で最も重要なのは口上である。芸やネタの珍しさが大切なことはいうまでもないが、それを生かすも殺すも口上である。

見世物の口上には、大きくわけて、アラダンカ、ナキゴマセ、ダラダラコマセ、の三種類がある。アラダンカは都市や漁師町などの気の荒い客が多い所でやる口上で、景気よくまくしたてるようにしてしゃべる。これに対してナキゴマセは、客の同情をひくように哀れな調子でしゃべる。ダラダラコマセは、雨で客足の少い時やお化け屋敷のように盛り上がりをつけなくてもよい出し物の時にダラダラとしゃべる方法である（拙稿「見世物」・現代思想 一二巻三号、一九八四年十一月）。「十界」の口上はナキゴマセである。お婆さんが多く集まるお地蔵さんの縁日などでは、「何の因果か、この娘はこんな姿で生れたので母親にもいじめられ……」というようなことをメンメンとつたえるように話したものだ。

江戸時代の見世物について、朝倉無声や古河三樹は、その種類を次のように大きく三つに分類している（『見世物研究』春陽堂、一九二八年。『見世物の歴史』雄山閣、一九七〇年）。

奇術、曲芸、舞踊、武術などの技術や芸能をみせる、  
芸見世物。

畸人、珍禽獸、異虫魚、奇草木石などの天然珍奇なものをみせる、  
奇形見世物。

練物や張抜きの人形、カラクリ装置、ガラス細工、籠細工、菊細工、貝細工などの細工物をみせる、  
細工見世物。

これらの江戸時代の見世物のうち、明治以後、  
技芸見世物の多くは寄席や劇場やサーカスに、  
細工見世物は博覧会や遊園地のパノラマや菊人形などに変わり、  
奇形見世物の多くが動物園や植物園、水族館、科学博物館などに吸収され、  
形を変えて生きのびていった。そして怪しげでいかかわしいものが見世物として残った（拙稿「都市と王権」、  
国立歴史民族博物館編『変身する 仮面と異装の精神史』平凡社、一九九二年）。

江戸時代の見世物には、逆さ首、一寸法師、三ツ足女、蟹娘、鬼娘、達磨男、蛇女、熊女、いかもの食い、耳から声を出す男、歯力男、ろくろ首、生首、ふたなり娘……など、  
グ

ロテスクで怪しげな見世物が数多く興行されていた。

一九七〇年代には、浅草の花屋敷の前に常設の稲村劇場という見世物小屋があり、各地の神社の祭礼で見世物が興行されていたが、一九八〇年代の高度経済成長期に、見



写真5 見世物（女ターザンの火炎の術）



写真6 見世物の看板絵

世物は急激に姿を消していった。私が西村岩吉さんから見世物の話を聞いたのも、一九七〇年に岩吉さんが浅草の稲村劇場で「女ターザン三人娘」という見世物を興行していた時であった。「女ターザン」は、火炎の術、クサリ通し、

マキツギ、パサバラシ、の四種類の芸を見せていた。「火炎の術」は、二十本ぐらい束ねたローソクを燃して、口の中に溶けたロウを流しこみ、ローソクの炎をめぐけて吹きつけ、大火炎をあげる。

「クサリ通し」は、クサリをまず右の鼻の中に入れて口に出し、そのクサリを今度は左の鼻の穴に入れて口に出す。

「マキツギ」は、生きた蛇を尻尾の方から鼻の穴に入れてゆき、尻尾が口から出てくると尻尾をもってひっぱり出す。そうして蛇を鼻から口に通したまま、右手で蛇の頭を持ち、左手で尻尾を持って大ミエを切る。なお、マキとは蛇、ツギは使うという見世物の符牒で、マキツギは「蛇使い」という意味である。



写真7 見世物小屋の口上

「パサバラシ」は、ニフトリを食う芸で、パサはニフトリのこと、羽根をバタつかせ鳴き叫ぶニフトリの首にかみつぎ、首を食いちぎる。その切り口にかぶりつき、血を吸い肉をムシャムシャと食べ、最後に大きく口を開き舌を出して

食い終ったことをみせる。この時、実際には舌の裏側に肉を隠しておいて後で吐き出し、また血も飲みこまないで口の中に留めておいて吹き出す。すると上半身が血まみれになり壮絶な感じに見せる。

蛇使いの見世物は、「見る目もつるわしい差合い知らぬ蛇女、こはし危し恐ろしき見世物……」（『天和笑季集』）と、江戸時代にもあったが芸の内容は明らかでない。明治の終りころ、佐々木喜善が靖国神社の秋季大祭で「蛇使い女」の見世物を見たことを記しているが、蛇を頭から口の中にゆつくりと入れると、蛇が頭の方から出てくるのをひきだすという芸であった（『風俗資料』三冊、昭和五年）。こういう蛇使いの芸が、女ターザンのように、蛇を鼻から入れて口から出す芸へと発



展したものと思われる。

女ターザンの見世物では、西村岩吉さんは、「何の因果か、同じ母親の体内から生れる子が三人ともこんな姿で生れました。お姉さんたちは、生きた蛇や蛙を食べるというウワサのために村にも住めなくなり、東北の霊山として名高い月山という山に登り、裸、ハダシそのまま、山から山、谷から谷、深山幽谷をおのが住み家となし、蛇や蛙を食料とし、あらゆる悪食をつないでまいりました……」という口上をしゃべっていた。アラダン力で一氣にまくしたてるので、本当にこんな地獄のような世界が現実にあるかのように思わせてしまうのである。まさに話芸の力である。

それにしても、なぜキツギやバサバラシのような恐ろしい芸が寺社の境内で興行されるか。こうしたグロテスクな見世物が興行されるのは、祭礼や縁日という特別な日の寺社の境内である。江戸時代にも常設的に興行されたのは、浅草奥山、上野山下、両国という江戸最大の盛り場であった。浅草奥山は徳川家の最初の祈願寺の浅草寺の境内。上野山下は徳川家の祈願寺の東叡山寛永寺の崖の下にあった。両国の回向院は明暦の大火で焼死した一〇万八〇〇〇余人の遺体を埋葬した地に建てられた寺である。いずれも非日常的な江戸最大の宗教空間であった。

## 宗教と芸能

ここで立山曼荼羅と見世物をくらべてみると、見世物がマキツギやバサバラシのようなグロテスクな芸能を神聖な寺社の境内で興行した理由が明らかになってくる。

立山曼荼羅では、地獄の恐ろしさを強調することで、立山

登拝と布橋灌頂会の救済を説いたのは、立山衆徒が立山で生きる宗教民であるからにほかならない。

一方、見世物の方は、もっぱら地獄の恐ろしさだけを強調している。見世物が興行されたのは、神社仏閣であった。見世物師たち芸能民が生きたのは都市の非日常的な場所であり、立山曼荼羅でいえば、樹木がない浄土や地獄の他界空間にあつている。見世物が神社仏閣の境内や参道で地獄の恐ろしさを強調するほど、神社仏閣が浄土として輝くことになる。

山の宗教民と都市の芸能民を「浄土と地獄」というフィルターを通して眺めると、限りなく近い関係で浮かびあがってくるのである。

〔写真はすべて©内藤正敏〕